

2014年11月19日

日本台湾学会会員各位
台湾史研究会各位

日本台湾学会関西部会係
台湾史研究会事務局

日本台湾学会第12回関西部会研究大会

師走の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本年度も下記の要領で第12回日本台湾学会関西部会研究大会を開催いたします。皆様にはふるってご出席くださいますようお願い申し上げます。

本年度も日本台湾学会と台湾史研究会との共催で行います。

記

日時：12月20日（土） 12時20分（受付開始）～

場所：神戸学院大学（有瀬キャンパス） 6号館 2階 621号室

各報告 報告 25分 コメントと質疑応答 15分

<プログラム>

自由論題の部 12:40～14:40

① 鉄道の「帝国」化—鉄道滞貨問題と「台中連絡問題」を中心に—

松葉隼（一橋大学・院）

評論：やまだあつし（名古屋市立大学）

本稿では、日本統治時代の台湾に構築された鉄道が「植民地」の一交通機関から、日本を基底から支える「帝国」の交通機関へと変貌した様子を明らかにする。これまでの先行研究においては、こうした鉄道の植民地から帝国への移行過程については明確に意識されておらず、植民地台湾の鉄道に対する理解も平板なものであった。そのために、鉄道がいつ、どのように帝国の交通機関へと移行したのか、またこうした移行が台湾社会でどのように受容されたのかという点については看過されてきた。本稿では、以上の点について明らかにするため、第一次世界大戦末期に生じた「滞貨」問題と、滞貨問題解消のために建設された「海岸線」をめぐる一連の「住民運動」である「台中連絡問題」を見ていく。両者は植民地台湾の鉄道輸送能力不足が引き起こした問題であり、台湾はこの問題に対応する中で鉄道網を中心とした交通網を拡充した。しかし、その拡充は島内の交通を円滑化する以上に、内地との接続を強化しようとするものであった。すなわち、台湾の鉄道はこれら2つの問題を解消していく中で、植民地内部よりも帝国への移動を重視する鉄道輸送体系を構築するという「帝国」化を進行させたのである。

② 帝国資源開発と植民地—台湾馬政計画を中心に—

岡崎滋樹（立命館大学・院）

評論やまだあつし：（名古屋市立大学）

本報告は、「馬」という従来あまり関心が向けられなかった畜産資源を通じて、日本の植民地政策における根本問題を指摘する。

農林省と陸軍省は、1936年から始まる馬政第二次計画に合わせて、外地馬政計画も企画する。

この中で、台湾総督府は馬匹増産を迫られるが、拓務省も関与せざるを得ないがために、植民地政策を主導する中央政府の根本問題が浮き彫りになっていく。外地を管轄する拓務省は、内地の馬政調査会で堂々と台湾馬政計画を立案するが、じつは同省には馬政専任職員がいないという大問題が判明する。それはまた、最も職員の少ない官庁が、広範な外地に関わる全ての業務を遂行しなければならないという、中央政府自らが招いた植民地政策上の欠陥でもあった。

これまで拓務省は陸軍省などと対立していたと捉えられる傾向があるが、そもそも拓務省には他省と対立するだけの威厳と人材が備わっていなかった。この植民地政策を担う小規模官庁の本質と限界を、台湾馬匹調査から馬政計画立案に至る過程の中で明らかにしていく。

③ 「芝山巖事件」の慰霊と定型化—「芝山巖祭」の開催に着目して—

山本和行（天理大学）

評論：Jenine Heaton（関西大学非常勤）

日本による台湾統治が始まって約半年が過ぎた 1896 年 1 月、抗日武装蜂起の動きが台北に迫るなか、日本人学務部員 6 名と軍夫 1 名が抗日ゲリラによって殺害されるという事件が起きた。「芝山巖事件」と呼ばれるこの事件は台湾統治が始まって間もない時期に発生したということもあり、その後の台湾における教員・教育関係者にとって、「芝山巖精神」という表現に象徴されるような精神的な拠り所としての位置を占めるようになっていった。

1990 年代以降、植民地期の史料の整理・公開が進み、事件そのものについての検討・考察が進められ、多くの研究成果が積み重ねられてきた一方で、事件がその後の台湾統治のなかでどのように捉えられ、「芝山巖精神」といった表現が生み出され、教員たちの精神的な拠り所になっていったのかについては、検討する余地が多く残されている。本報告では、そうした課題を明らかにするための手がかりとして、事件発生直後から定期的に行われていた「芝山巖祭」の開催の経緯に着目し、祭典開催による慰霊を通じて「芝山巖事件」が定型化していく過程について検討する。

シンポジウム 台湾と観光 15:00～17:00

最近の日本は台湾観光がブームとなっています。テレビで九份等の観光地が紹介される回数も増えました。もちろん台湾に観光へ行くのは日本人だけではありません。幾つかの観光地が中国人で溢れかえっているのはご承知の通りです。

さて観光は単なる物見遊山ではありません。その背後には経済・政治・文化、もちろん見る側と見せる側等、様々な立場と問題が錯綜する場です。今回の関西部会では、歴史学、文化人類学、経済学、そして旅行業の現場とそれぞれの立場から、台湾に関する様々な観光を考えてみたいと思います。

パネリスト：曾山毅（玉川大学：観光史研究の立場から）台湾の観光史

パネリスト：上水流久彦（県立広島大学：文化人類学・地域研究の立場から）

台湾人の八重山観光

パネリスト：川上桃子（アジア経済研究所：経済学の立場から）中国人の台湾観光

パネリスト：横井均（三普旅行社 営業部長：旅行業の立場から）現代日本人の台湾観光

司会：五十嵐真子（神戸学院大学）

懇親会 17:30～（会費 3000～5000 円）

参加される方は 12 月 13 日（土）までに、神戸学院大学五十嵐真子までご連絡ください。

アドレス igarashi@human.kobegakuin.ac.jp

<アクセス>

JR 明石駅からバス 20 分： 神姫バスの北 1 番乗り場から「神戸学院大学行」で終点下車

Arise Campus

海と山にはさまれた自然環境に恵まれたロケーション。

機能的かつ遊び心のあるキャンパスは、

いつも活気でいっぱいです。

※マップ内の青色の番号をクリックすると詳細をご覧になれます



<日本台湾学会関西支部会係>

京都光華女子大学キャリア形成学部 澤井律之

〒615-0882 京都市右京区葛野 38 番

tel 075(325)5343

mail rb062@mail.koka.ac.jp